

教員推薦図書 2026年1月

推薦教員	幼児教育科 杉本 亜鈴 先生	<p>【推薦コメント】</p> <p>幼児教育科では、毎年年度末に学生の学修成果をまとめた冊子『桐の花 ～幼児教育研究～』を発行しています。今回推薦する本は、この冊子に掲載された学生のゼミレポートで紹介されていたものです。その学生は東京成徳短期大学幼児教育科から東京成徳大学子ども学部編入しました。彼女が編入後に短大での学びをどのように発展させていくのか興味深く、本書を購入しました。この文章は本来『教員推薦図書』なので、学生レポートをきっかけとした今回のケースはいわば「逆輸入」でしょうか？印象的なタイトルとかわいイラストが描かれた表紙は手にとりやすく、とても読みやすい文章の本でした。テレビドラマ化の話題性もあり、お薦めする要素は盛りたくさんなのですが、その内容は衝撃的です。—— 車いすユーザーの母、ダウン症で知的障害のある弟、ベンチャー起業家で急逝した父—— 作者はその家族の長女です。しかし、この本の文章は悲壮感に満ちたものではありません。著者はこう綴ります。</p> <p>【人生は、一人で抱え込めば悲劇だが、人に語って笑わせれば喜劇だ】</p> <p>教員として学生の皆さんに本書をお薦めするうえでお伝えしたいことは、「この作者さんのようにどんな苦難にあるときも明るく楽しくあってほしい」という視点<u>ではなく</u>、この作者さんが苦しい気持ちを文章に変えて、人に読んでもらうことで昇華していったように、皆さんにも「自分にできる苦難の乗り越え方を見つけてほしい」ということです。文章だけでなく、例えば絵を描いたり、曲を演奏したり、自分が苦しんだことが共感性を持った表現として公のものとなったとき、人の心を打つ瞬間があることを知ってほしいと思い、この本を推薦しました。</p>
書名	家族だから愛したんじゃない、愛したのが家族だった +かきたし (小学館文庫)	
著者名	岸田 奈美 著	
出版社	小学館	
請求記号	914.6 / Kis	
資料ID	901127384	